

益友を読む

令和2年1月19日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長坪井利一郎

はじめに

別子銅山について郷土資料を当たるとなると、新居浜史談、山村文化、そして益友を見ることになる。新居浜史談は発行が続いているが、山村文化と益友は発行が途絶えてしまった。地域の情報発信の定期刊行物が無くなって残念である。益友は住友関係者の投稿が多いので多方面にわたり別子銅山に関する情報が得られる。別子銅山に関係して学習する助けとして「益友の中の銅山関係のリスト」を作成した。タイトルを「益友を読む」としたが、「益友を読む助け」が正しい。これまでに参考としたユニークな掲載も何点か紹介してみる。

1. 発行と命名

自彊舎は大正元年8月に旧別子の風呂屋谷に開設されたのは周知のところであるが、益友の発刊は意外と戦後であった。昭和29年10月であった。鷺尾勘解治が新居浜に帰ってきてから社会教育に専念してからだと分かるとうなずける。

会則によると、「益友会は新居浜企業関係の旧友が相親しみ互いに友情を楽しむために設けた会である。」「会員は旧を感謝し現在に安じて、曾て精魂を傾けた企業の健全を祈り、地方繁栄の為に公共の誠を致して老人の本務を楽しむを以って会友の精神とする。」の2条の意を暢ぶるために会報「益友」を発行するとある。

そして、益友の出典について発会式のあいさつの中で「孔子の益者三友、損者三友の教えを取りました。『直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり』というている。直言して隠すことなき者を友とし、誠実にして表裏なき者を友とし、博く古今に通うじている者を友とすれば、身の為に益であるといういみであります。」と述べている。

2. 益友の中の別子銅山関係リスト

巻一 号	表題
1-1	益友会会則・発刊の辞 益友会発会式記念写真 発会式に於ける挨拶並に趣旨（鷺尾勘解治） 会の設立まで 発会式記事
1-2	益友会会則・巻頭言
1-2	別子銅山開坑秘聞（村上八郎）
1-2	吉田貞吉さんを憶ふ(早川幸市)

2-6	文政頃の別子銅山 (原一日庵)
3-15	岩佐巖のことども (西村泰)
5-38	会報-私宅に仮に自彊舎を設けている(S33年2月号)
5-43	会報-6月14日に自彊舎建設後援会発起人会を開催 (S33年7月号)
5-46	会報-自彊舎学堂建設費募集を依頼 (S33年10月号)
6-56	銅山峯踏破の記 (村尾福乗) ※銅山峯の標柱写真あり
7-64・66・67	ああ悲惨であった別子山の水禍 (村上八郎)
8-82	明治初期時代の別子について-古老の話から (村上八郎)
8-82	自彊舎再建開堂式の記
9-2	料理の名人越智伊平さん (村上八郎)
9-5	別子の暴動騒議の遠因と其裏話 (村上八郎)
9-5	昔の別子鉦山坑内排水 (松葉藤之助)
9-7	別子銅山平和のいしずえ (村上八郎)
10-1~13-12	寺小僧から坑夫に 1~32(鷺尾勘解治)
14-2	広瀬翁と鷺尾先生 (村上八郎)
14-3~15-3	別子ラインと銅山 1~11 (川上喜一)
15-1	再び東平の思い出を(川上喜一)
15-2	東平の思い出 (岸田尚一)
15-4・5合併~8	広瀬幸平伝 1~3 (川上喜一)
15-6	惣開の碑を移転
15-9	伊庭貞剛伝 (川上喜一)
16-4	昔西之川出張の思い出 (西原海之助)
16-4	四阪島送電線開閉所四度目の引っ越し
16-5・7	再び東平在住当時の思い出 1・2 (川上喜一)
16-8・9	旧別子、東平方面見学 1・2 (川上喜一)
18-2	大鉛の写真(原石) (昭和46年2月)
18-10・11	私と東平 (一色準一郎)
18-12	自彊舎の命名のことども(鷺尾勘解治)
19-7・9	思い出の東平行脚 1・2 (川上賢祐)
23-10~23-12	自彊舎実業自習学校に就て (鷺尾勘解治)
23-6	奉納相撲の盛況-40年前の写真発見
24-4~24-6	改善会発会式に於ける講演-鷺尾勘解治 (川上賢祐)
24-11	異聞長兵衛記 (芥川三平)
24-12~25-8	私の入社前履歴 1~9 (鷺尾勘解治)
27-5	牛馬と鉦山 (平島繁夫)

- 27-8~28-7 労務管理者群像—鷺尾勘解治 1~9 (左合藤三郎)
- 27-2~27-12 別子銅山開坑の頃 1~10 (伊藤玉男)
- 28-1 大鉛の歌 (葛山健)
- 29-3 社団法人自彊舎記念会の概要
- 29-3 評伝—鷺尾勘解治翁 (左合藤三郎)
- 29-3 晩年の鷺尾先生 (片上修)
- 32-3~33-2 山伏南光快盛(伊藤玉男)
- 34-1~8 別子山村の草分け(伊藤玉男)
- 36-7~36-8 天満道と泉屋道 1・2(伊藤玉男)
- 36-11~36-12 黙翁鷺尾勘解治逸事 1~2(片上修)
- 36-1~37-7 黙翁鷺尾勘解治逸事 3~6(児島幸成)
- 37-3 鷺尾先生の思い出(加藤一正)
- 37-4 鷺尾勘解治逸事 (高橋末吉)
- 37-5 広瀬幸平翁の漢詩を読む(片上修)
- 37-9 楠公の銅像余聞(片上修)
- 37-9~37-12 新居浜の相撲物語 1・2・3・4 (白石正雄)
- 37-11 自彊舎の由来について (村尾福乗)
—自彊舎の命名のことども(18-12の再掲)—
- 38-7~37-8 伊庭貞剛とその語録 (片上修)
- 38-8~38-10 伊庭貞剛氏 上・中・下 (小野晋也)
- 38-10~38-12 謎の人物切上がり長兵衛1・2・3(白石正雄)
- 38-3~41-5 あかがね物語 1~40 (高嶺憧・伊藤玉男)
- 42-6 鷺尾勘解治を見送る写真
- 45-5 物言嶽北の別子鉦山鉄道の写真
- 45-6 泉寿亭の思い出 (竹田里枝子)
- 46-4~46-7 別子銅山発見者—切り上り長兵衛の功を讃える1・2・3・4
(白石正雄)
- 50-7 三翁展
- 51-4 大山積神社参道両脇の柱石刻文 (長尾豊)
- 52-10 大鉛第五節の歌詞について (芥川三平)
- 53-5 白川渥の別子開坑記について (芥川三平)
- 53-7 蘭塔法要—追想記 (井上省二)
- 53-7 鷺尾勘解治自伝を読む (横山栄)
- 53-9 追弔法会—追想記2 (伊藤玉男)
- 53-10~59-11 工都新居浜の誕生について 1・2 (井上省二)
—私の考えた新居浜の将来—

- 5 3 - 1 2 新年祭式—追想記 3 (井上省二)
- 5 4 - 2 別子銅山・句碑建立の足跡(井上省二)
- 5 4 - 2 ~ 5 4 - 3 自彊舎考 1・2 (井上省二)
- 5 4 - 4 大山積神社春季例大祭—追想記 4 (井上省二)
- 5 4 - 7 鷲尾翁の禪修行と教化 (井上省二)
- 5 4 - 9 別子銅山・あかがねの道 (井上省二)
- 5 4 - 1 0 銅の異名を蜀山居士と申し候 (近藤秋夫)
- 5 4 - 1 0 別子銅山休山後の新居浜 (猪瀬和志)
- 5 4 - 1 1 ~ 5 4 - 1 2 円通寺小足谷出張所跡—墓地 (谷口淑子)
- 5 5 - 4 ~ 5 5 - 6 郷土の地名について (坪井利一郎)
- 5 5 - 3 住友の源流 (末岡照啓)
- 5 5 - 7 田村久五郎と別子鉦山鉄道下部線 (小田久美子)
- 5 5 - 8 別子銅山の歌碑 (井上省二)
- 5 5 - 9 別子銅山の紛争・暴動 (井上省二)
- 5 5 - 1 0 別子銅山近代化産業遺産を生かしたまち学習からまちづくり学
習へ(河野義知)
- 5 5 - 1 0 ~ 5 5 - 1 1 別子銅山と久米栄左衛門通賢 1・2 (入江義博)
- 5 5 - 1 2 月刊インタビュー—自彊舎のこと (井上省二)
- 5 5 - 1 2 長崎奉行が大阪銅座へ出張の一件(喜代吉栄徳)
- 5 6 - 2 鷲尾先生の新居浜構想のその後 (森賀盾雄)
- 5 6 - 4 ~ 5 6 - 5 切り上り長兵衛異聞 (藤田敏雄)
- 5 6 - 6 住友家法に学ぶ (井上省二)
- 5 6 - 7 ~ 5 6 - 8 別子銅山・住友墓地—瑞応寺(谷口淑子)
- 5 6 - 1 0 ~ 5 7 - 1 別子銅山産業遺産とその思い出 1・2・3・4 (井上省二)
一端出場・泉寿亭・山根・山根製錬所—
- 5 6 - 1 2 鷲尾勘解治と新居浜(藤田敏雄)
- 5 7 - 1 別子銅山吹き方文書 (喜代吉栄徳)
- 5 7 - 3 別子銅山と住友吉左衛門友成 (篠崎昭彦)
- 5 7 - 7 別子銅山と落葉松 (近藤日出男)
- 5 7 - 9 レポート 別子の山の恩恵(近藤秋夫)
- 5 8 - 3 鈴木馬左也について (河野義隆)
- 5 8 - 4 別子銅山の植林と伊庭貞剛(大條雅久)
- 5 8 - 8 歓喜・歓東坑の間符について (坪井利一郎)
- 5 8 - 1 1 鷲尾勘解治と新居浜のまちづくり (谷口淑子)
- 5 8 - 1 2 ~ 5 9 - 2 再録 評伝—鷲尾勘解治翁 1・2・3 (左合藤三郎)
- 5 9 - 6 別子銅山【炭の古道】探訪(加藤正典)

59-8~59-9	「幕末の三舟」と「別子銅山」(入江義博)
59-10	旧別子銅山付属林の今昔(加藤正典)
59-10~11	鷺尾勘解治翁を読む 1・2 (坪井利一郎)
59-12	大鉛の縄掛け(坪井利一郎)
60-1	大鉛の歌—歌詞は変わっていた(坪井利一郎)
60-2	第一次泉屋道(坪井利一郎)
60-3	立川銅山道考—第二次泉屋道は使われなかった(坪井利一郎)
60-4~60-5	別子銅山の歴史 1・2 (坪井利一郎)
60-6~60-7	鈴木馬左也 1・2 (坪井利一郎)
60-9	再録 鷺尾勘解治先生胸像除幕式举行 (村尾福乗)
60-10	再録 自彊舎記念会の概要 (猪瀬和雄)
58-別10	再録 評伝—鷺尾勘解治翁 (左合藤三郎)
58-別10	再録 晩年の鷺尾先生 (片上修)

3. 自彊舎

明治14年(1881)5月10日、鷺尾勘解治が現在の神戸市に生まれる。

大正元年(1912)8月、旧別子の風呂屋谷の不用になった旧病院施設を会社から借り受けて自彊舎を設置する。塾生30人余り。住友総本店の鈴木馬左也総理事が自彊舎と命名する。

(明治45年は7月30日まで、7月31日からは大正元年になる。)

大正5年(1916)1月、東平に採鉱本部が移るに併せて東平に自彊舎が開かれる。

大正6年(1917)5月、休職により東平の自彊舎が中断される。

大正8年(1916)5月、復職により東平の自彊舎が再び開かれる。

大正15年(1926)11月、会社の経営する独身寮として川口新田に自彊舎が開かれる。

昭和4年(1929)5月、明治35年(1902)制定の別子鉱業所講習所が廃止され、新たに自彊舎実業自習学校が開校される。

昭和6年(1931)2月、常務理事に昇進し、大阪に栄転する。

昭和8年(1933)12月21日、住友を辞任する。

昭和26年(1951)冬、新居浜の人々と交流する。

昭和28年(1953)5月3日、川東地区合併記念式典に来賓として新居浜市から招かれる。

昭和28年(1953)8月31日、三石から新居浜市に引っ越す。まず田所町44番地の田村従一郎の座敷に、次いで宗像神社参道沿いの旧合田正良邸に仮住まいする。生活費支援として後援会の運動を展開する。

昭和29年(1954)1月25日、燧洋倶楽部が結成される。

昭和29年(1954)9月19日、益友会が結成される。

昭和29年(1954)10月、「**益友**」が創刊される。

昭和33年(1958)6月14日、自彊舎建設後援会発起人会を住友倶楽部で開き、後援会が設立される。

昭和33年(1958)11月、在浜住友5社から元塚の住友共電の幹部社宅が鷺尾勘解治の住居兼仮自彊舎として寄贈される。

昭和36年(1961)9月22日、住友共電社宅住を改造した祭壇を設けた正式な講堂が開堂される。

昭和38年(1963)、川口新田の自彊舎が閉鎖される。

昭和54年(1979)11月10日、宗像神社境内に燧洋倶楽部、益友会員により頌徳碑を建立する。

昭和56年(1981)4月13日に亡くなる。満99歳11月4日。鷺尾勘解治が亡くなられたのを機会に、社団法人自彊舎記念会を設立する。

昭和59年(1984)5月、川口新田の自彊舎屋が解体される。

平成23年(2013)10月10日、社団法人自彊舎記念会を解散する。

明治 明治元年(1868) 1月25日～明治45年(1912)7月30日

大正 大正元年(1912) 7月31日～大正15年(1926)12月25日

昭和 昭和元年(1926)12月26日～昭和64年(1989)1月7日

平成 平成元年(1989) 1月 8日～平成31年(2019)4月30日

令和 令和元年(2019) 5月 1日～

4. 鷺尾勘解治の経歴

明治14年(1881)5月10日、神職をしていた鷺尾弥三衛門の長男として鷺尾勘解治が現在の神戸市に生まれる。

明治25年(1892) 父の宮司としての転居により長沢小学校へ転校する。

明治29年(1896) 兵庫県立第一中学校に入学する。

明治34年(1901) 熊本第五高等学校に入学する。

明治35年(1902) 熊本の見性寺の西山宗徹和尚に師事、炊飯小僧となる。

明治37年(1904) 京都帝国大学法学部に入学する。

京都の大徳寺芳春院管広州和尚の門弟となる。炊飯小僧となる。

明治40年(1907) 京都帝国大学法学部を卒業する。

管老師に住友総理事・鈴木馬左也への紹介で住友へ入社する。

管老師の看病のため出社の猶予を願い出て鈴木への承諾を得る。

10月、別子鉱業所に赴任する。

明治41年(1908) 2ヶ月の休暇願を出し、生野銀山で坑夫体験をする。

別子銅山に帰り、坑内勤務に従事する。

明治43年(1910) 兵庫県武庫郡山田村の西岡清三郎の娘・良と結婚する。

大正 元年(1912)8月、旧別子の風呂屋谷の不用になった旧病院施設を会社から借り受けて自彊舎を設置する。塾生30人余り。住友総本店の鈴木馬左也総理事が

自彊舎と命名する。

(明治45年は7月30日まで、7月31日からは大正元年になる。)

- 大正 5年(1916)1月、東平に採鉱本部が移るに併せて東平に自彊舎が開かれる。
- 大正 6年(1917)5月、休職して福岡の療養所で転地療養をする。東平の自彊舎は中断する。
- 大正 8年(1916)5月、復職により東平の自彊舎が再び開かれる。
- 大正11年(1922) 別子鉱業所副支配人兼労働課長。
労使の意思疎通、労働者福祉、共存共栄から「親友会」を組織する。
- 大正13年(1924) 採鉱課長を兼務する。
- 大正15年(1926)11月、会社の経営する独身寮として川口新田に自彊舎が開かれる。
「改善会」を組織する。
別子鉱業所支配人となる。
- 昭和 2年(1927) 「別子末期の経営」を発表する。今後17年で掘り尽くす。
「新居浜後栄策」を発表する。
- 昭和 3年(1928) 大山積神社社殿を造営する。
奉納相撲の相撲場づくりで作務を始める。 日曜毎に数百人
山根グラウンド完成する。
- 昭和 4年(1929)5月、明治35年(1902)制定の別子鉱業所講習所が廃止され、新たに自彊舎実業自習学校が開校される。
港内の浚渫と埋め立て、星越山田社宅用地を尾鉱で埋め立てする。
- 昭和 5年(1930) 住友別子鉱山(株)専務取締役。
住友合資会社理事。
星越山田社宅の建設が始る。
- 昭和 6年(1931)2月、常務理事に昇進し、大阪に栄転する。
共存橋、共栄橋、申孝橋の命名、昭和通り完成する。
- 昭和 7年(1930) 欧米へ商工業視察で出張する。
- 昭和 8年(1933)12月21日、住友を依願退職する。神戸市御影に居住する。
- 昭和10年(1935) 岡山県和气郡三石町の大平鉱山に勤める。
- 昭和12年(1937) 東京の大日本航空輸送に常務で迎えられる。
- 昭和14年(1939) 五反田クレー製造所を始める。
- 昭和26年(1951)冬、新居浜の人々と交流する。
- 昭和28年(1953)5月3日、川東地区合併記念式典に来賓として新居浜市から招かれる。
五反田クレー製造所を息子の寧に譲る。
- 昭和28年(1953)8月31日、三石から新居浜市に引っ越す。まず田所町44番地の田村
従一郎の座敷に、次いで宗像神社参道沿いの旧合田正良邸に仮住まい
する。生活費支援として後援会の運動を展開する。
- 昭和29年(1954)1月25日、燧洋倶楽部が結成される。
- 昭和29年(1954)9月19日、益友会が結成される。

昭和29年(1954)10月、「益友」が創刊され。

昭和33年(1958)6月14日、自彊舎建設後援会発起人会を住友倶楽部で開き、後援会が設立される。

昭和33年(1958)11月、在浜住友5社から元塚の住友共電の幹部社宅が鷲尾勘解治の住居兼仮自彊舎として寄贈される。

昭和35年(1960) 若宮小学校に「自律」の書を掲額する。

西中学校に「自潔」の書を掲額する。

昭和36年(1961)9月22日、住友共電社宅住を改造した祭壇を設けた正式な講堂が開堂。

惣開小学校に「終慎」の書を掲額する。

昭和38年(1963) 川口新田の自彊舎が閉鎖される。

昭和54年(1979)11月10日、宗像神社境内に燧洋倶楽部、益友会員により頌徳碑を建立。

昭和56年(1981)4月13日に亡くなる。満99歳11月4日。

鷲尾勘解治が亡くなられたのを機会に、社団法人自彊舎記念会を設立。

5. ユニークな掲載

6-56 銅山峰踏破の記

銅山峰の標柱写真が掲載されている。日和佐初太郎の写真集「山・浜・島」にも銅山峰の標柱が写っている写真が掲載されているが、標柱の位置が特定できないでいた。益友の写真で、標柱が大露頭から稜線への登り道が、稜線の縦走路と出会ったT字路のところであることが分かった。文を読み進めていくと、歓喜坑、蘭塔場、自彊舎跡、山神社、目出度町、重任局などの標柱があると記載している。昭和34年に案内の標柱が立てられていた。

角石原北口に通ずる坑道南口の上に東延合宿所がある。

※角石原北口に通ずる坑道→第一通洞

8-82 明治初期時代の別子—古老の話 「住友鉄道布設に付て田村久五郎氏の功績」が出ている。昭和36年の掲載だから、昭和53年刊行の「別子鉱山鉄道略史」のP3「用地買収」の注釈記載の田村久五郎の元は益友と考えられる。

9-2 料理の名人越智伊平さん 越智伊平さんは、西の川支所の製錬課長・越智宇平の兄で、四阪島日暮亭主越智倉太郎さんの父、当市登道の越智医院長の祖父に当たる人で、初め西条で旅館を営んでいたが、総開の住友分店から招かれて当地転居して泉寿亭と号して旅館兼料理屋を営む。(西条では「おさかな屋」の屋号。西条藩ゆかりの料理人。)

14-4 別子ラインと銅山(2) 別子では大鉞を南口から縁起の端の大山積神社まで大鉞の歌を唄いながら大鉞を橇に乗せ雪の上を引き揚げ、大

- 山積神社で大鉋式を行い、直に溶鋳炉に運んで吹き初めの式を行っていた。
- 14-5 別子ラインと銅山(3) 小足谷小学校には教室のほかに講堂兼運動場の施設もあった。父兄は学費を要しなかった。南の高い石段の上に教員室と理科教室があった。
「物住」の地名は、南光印快盛が魔物を封じ込めたところとして名づけたと伝えられている。
- 14-11 別子ラインと銅山(8) 別子銅山では明治の中期、石油が入荷して螺燈やローソクを廃して、カンテラを使用し大正時代には瓦斯ランプを使用した。昭和時代になり、アセチレ瓦斯が充電電池を採用するようになり、キャップランプの使用となって今日に及んだのである。
- 15-6 惣開の碑を移転 ラクタム工場の一隅にあった「惣開の記」碑が、正門前の緑緑地帯に移転した。「新居浜の文化財」に掲載の写真をたよりに、惣開の住友化学の守衛に断って碑を探しに敷地内に入って行った思い出がある。
現在は旧住友銀行新居浜出張所横に立っている。
- 16-4 四阪島送電線開閉所四度目の引っ越し
別子鋳業所の新製錬所(東予製錬所)計画が進み、四阪送電線と岩鍋開閉所を移動させなければならなくなった。
四阪送電開始の大正11年は地蔵口
昭和18年は 仏崎 尾鋳埋立てによる
昭和35年現在は 岩鍋 尾鋳埋立てで更に
4度目は 西条市祝谷 東予製錬所建設
- 16-8 旧別子東平方面見学(1) 昭和35年春から川之江～日浦を1日3往復定期バスが通うようになる。
- 27-9 別子銅山開坑の頃(9) 「別子銅山開坑の頃」は、伊藤玉男が山中生活からの地理的考察と通説別子銅山史との不自然さを考察した大作である。その9回目に一の森～遠登志の「長尾の西側を巻いて東平に達する山道があり、東平坑が閉山するまで時折利用されていた。」とある。坪井が「立川銅山道考」で地形図に見つけた山道が使われていたと記述した山道。
- 38-3～ あかがね物語 「立川銅山道考」をまとめているときに読む。第二泉屋道に疑問を懐いていた人がいたのを知る。確証がつかめなっていたのでペンネームの高嶺懂で書いていた。これだけ山内のことが分かっているのは伊藤玉男だと読んでい

- たら、原稿渡しで本名を記載していたために1回だけ伊藤玉男と益友に掲載されていた。
- 45-6 泉寿亭の思い出 泉寿亭で住友各社の主幹者が鷺尾勘解治と食事をしながら話を聞くのが1年の締めくくり行事であった。
- 51-4 大山積神社参道両脇の石柱刻文 石段の両端に2文字と4文字が刻まれた背の低い石柱が並んでいる。鷺尾勘解治が山本竟山流で揮毫した。自然を愛し、人を愛し上下一心、和・畏敬を表したものである。2文字のものは、社殿に向かって右と左で対になって4文字となる。下から順に、青山緑水、清風明月、移風易俗、年豊人楽、剛健偕和、勤敏安業、維徳維明、呈祥献瑞、山高海濶、光天照地。中の鳥居の玉垣の親柱右が忠実服業、左は上下一心。上の鳥居の玉垣の親柱右は国基悠久、左は作業安全、裏面は新田自彊舎塾生一同。
- 52-10 大鉞第五節の歌詞 明治末にまとめられた別子郷土誌を読んで、現在歌われている5番の歌詞「大鉞の絵」は「大鉞の酔」であることを指摘している。
- 55-3 住友の源流 末岡照啓の益友会での講演録が特集として掲載されている。別子銅山を経営していた住友家がどんな家であったかとのルーツから、別子銅山の意義、住友グループの事業精神へと展開して話している。
- 56-10～別子銅山産業遺産とその思い出 端出場・泉寿亭・山根・山根製錬所
井上省二に知っていることを益友に書いておいてくださいとお願いして、掲載されたものである。

6. おわりに

別子銅山に関する学習をするには、「益友の中の別子銅山関係リスト」を参考にして、各自のテーマに従って読んでいくしかない。テーマを持たなくても順番に読んでいくと知らなかったことが書かれているのに出会う。

別子銅山記念図書館の益友も第1巻から第60巻までそろえているが、欠本があったので可能な限り補った。それでも尚欠本があるのでご了承願いたい。

51巻4号で「大山積神社参道両脇の石柱刻文」が紹介されていたが、その前面の石柱の刻文については紹介されていないが、令和元年に住友商事㈱の役員に質問されて調べたので文末で紹介する。

大山積神社の県道前の石柱

2019年11月7日 坪井利一郎

南 表 **廣大建祀肅雍不忌** 廣大に建て祀り、肅雍して忌ならず

おいにお祀りし、心安らかにして忌まわしからぬ

建祀 たてまつり = 奉り

肅 つつしむ

雍 やわらぐ いただく

不忌 いまわしからず

裏 **住友肥料製造所新居濱工場**

土佐吉野川水力発電所株式会社

職員一同

北 表 **衆庶循緒福祉無疆** 衆庶は福祉の緒に循^しがいて、疆無し

諸々の民は、幸せの端緒に従って限りなし

衆庶 もろもろの民

循 めぐる したがう

緒 いとぐち

福祉 しあわせ

無疆 限りない 「受福無疆」

裏 **昭和四年五月一日**

(注) **大山積神社**は、元禄7年(1694)の大火の後に、別子銅山の鎮護の神として大三島の大山祇神社から勧請して旧別子の縁起の端に建てられた。事業の変遷とともに、明治26年(1893)に重任分局敷地へ、大正4年(1915)に東平へ、そして現在の生子山麓には昭和3年(1928)に奉遷して来た。

生子山の奥社は、明治21年(1888)の惣開製錬所の建設に伴い磯浦に遷座していたが、昭和2年(1927)に内宮神社に仮遷座し、昭和4年(1929)に角野新田に遷座。石柱も同年に建立された。その後、昭和12年(1937)に生子山の奥社として鎮座している。四阪島へは、明治38年(1905)の四阪島製錬所操業に伴って遷座した。最初は講堂の西に山神社として鎮座していた。美濃島南西部の現存の社殿は開坑二百五十周年の昭和16年(1941)に完成した。本館横には大山積神社分霊の祠がある。

大山祇は社の名称、大山積は神様の名前。大山祇と大山積の違いは本社と分社の違い。

大山積神社の社殿前の石柱

2019年12月11日 坪井利一郎

南 表 **神威高恭廣徳惟馨** 神威は恭を高め、徳を広め、馨を惟う

神の威力は高恭し、広徳し、惟香す。

恭 うやうやしい 敬意が態度にあらわれたもの
惟 おもう

裏 **臼井定民**

龍野昌之

北 表 **祖業永昌斯民以寧** 祖業が永く昌えれば、すなち民は寧を持つ

別子銅山が末永く栄えれば、即ち民は安らかに暮らせる

昌 さかえる
斯 当面の事物をさす ここに すなわち
寧 やすらか おだやか 異常がない

裏 **昭和四年五月一日**

大山積神社の上の鳥居

南 裏 **東平改善会**

端出場改善会

新居濱改善会

北 裏 **昭和四年五月一日**

大山積神社の中の鳥居

南 裏 **住友豫洲親友会**

北 裏 **昭和四年五月一日**

大山積神社の灯籠

南 裏 **昭和四年五月一日**

北 裏 **昭和四年五月一日**

大山積神社の下の鳥居

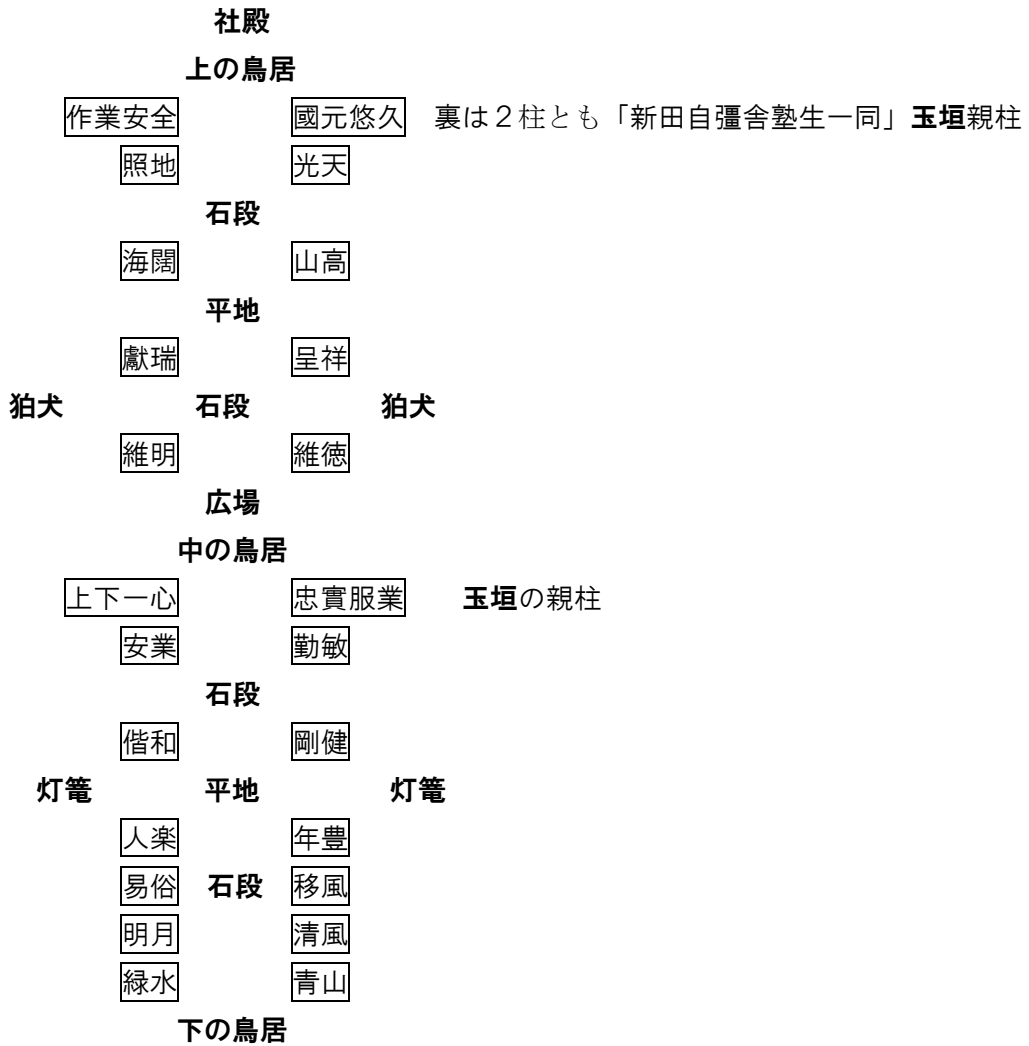
南 裏 奉 平成二年十一月吉日
納 別子開坑三百記念
北 裏 奉 平成二年十一月吉日
納 別子開坑三百記念

大山積神社の下の鳥居前の幟立石柱

南 表 奉納 **神社紋** 大山積神社
北 表 奉納 **神社紋** 大山積神社

※神社紋は、八角形の中に「へ」の三重ね

大山積神社の小石柱



四字の意味

國元悠久	国の基礎は永遠である。国家安泰。
作業安全	仕事の行いは安全を常とする。
忠實服業	忠実に業務に従事する。
上下一心	上に立つ者も、下の者も心を一つに合わせる。
光天照地	天を ^{てら} 光らし、地を照らす。天地を光照す。
山高海潤	山高くして海ひろし。志は山のように高く、心根は海のように広く。
呈祥獻瑞	愛でたきものを奉呈し、愛でたきものを献上する。祥瑞を呈献す。
維徳維明	美徳を持ち続け、聡明を持ち続ける。明徳を維持する。
勤敏安業	仕事に励み、仕事に満足する。
剛健偕和	心強く健やかにして、多くの人と和やかにする。
年豊人楽	豊作の年は、人は生活を楽しむ。
移風易俗	人々の生活習慣を変え、世の中を良くする。
清風明月	清浄な風が塵を吹き払うと、満月もきれいに見える。
青山緑水	青々とした山と、透明な水のある豊かに自然。